

午年に思う

小城 ゆり子

今年（2014年）は、午年である。甥のA男ももう48歳にもなったんだなあ、と感慨を新たにする。彼は、1966年、丙午の生まれである。次の午年、2026年には還暦、60歳となる。

1966年には、子供を産まないにしよう、という動きがあった。丙午なので、女の子が生まれると困る、というのである。丙午は火勢が強く、この年には火災が多い、という江戸時代初期の迷信があった。それが、丙午生まれの女性は、気性が荒く、夫を食い殺す、ということんでもない妄想に変わった。八百屋お七が丙午生まれだというのである。

八百屋お七は、文字通り八百屋の娘であったが、江戸の火事で焼け出され、家が再建されるまでの間、寺に預けられた。そこで彼女は寺小姓と恋仲になり、家に引き取られてからも何とかして彼と会いたいと思った。しかし、それがかなわず、また火事になったら寺に預けられ、彼と再会できるかと思ひ、家に火をつけた。火は燃え広がり、彼女は放火犯として火刑に処せられる。1683年のことである。お七は1666年丙午生まれだということであるが……当時、年齢は数えて計算されていた。だからお七は18歳だということになるが……

お七は16歳で丙午生まれではなかった、と亡くなった私の父が言っていた。それなのに、西鶴が話を面白くするために、「好色五人女」の中で彼女は丙午生まれである、としたのだ、という。このため、丙午生まれの女性は忌み嫌われ、嫁の貰い手がなく、1906年生まれの女性には、自殺者も多かったとか。すべては西鶴のやったことである、という話であった。

しかし、西鶴はそんな無責任なことはやっていない。お七を丙午生まれにしたのは、浄瑠璃作家の紀海音である。計算上、年が合わないのに、海音が無理やりお七を丙午迷信に結び付けたのである。

丙午生まれの女性が悪女だとするなら、1846年生まれのと宮はどのようなのだらう？

明治になってから、1906年生まれ的女性たちは、迷信に苦しめられた。でも、悪女だったわけではない。この年に生まれた女性には、女優の杉村春子、山本安英、俳人の鈴木真砂女、服飾デザイナーの田中千代などがある。

稀代の悪女、阿部定も1906年（明治39年）生まれとされている。

阿部定は、芸妓や娼妓を転々としていた女性だが、愛人を絞殺し、その性器を切り取って持っていた。これが猟奇的殺人事件として昭和の世間を賑わしたのである。なぜ彼女はそんなことをしたのか？ 彼女は言っている「私は彼をとっても愛していたので、彼のすべてがほしかった。彼を殺せば他のどんな女性も二度と決して彼に触ることができない」とい、彼を殺した」彼の性器を切断したのは、「私はいつも彼の側にいるために、それを持っていきたかった」からだという。

さて、この実在の女性、阿部定は、丙午生まれであろうか？ 調べてみると、彼女は、明治38年生まれで、丙午の1年前に誕生しているのである。つまり、彼女は丙午とは関係がない。

問題の1966年生まれである。昭和も41年だというのに、丙午の迷信は生きていた。

男女の産み分けはできないから、この年は子供を産まないよう、男女ともに努力していた。産まれるのが男の子なら何の問題もないが、女の子だと嫁の貰い手もなく、困る、というのである。若い男女は、結婚を遅くしたり、避妊したりして、この年に子供を産まないようにした。実際に、この年の出生数は、前年比でマイナス46万人と激減し、その反動で、翌年は、例年よりも多い200万人近い出生数となった。

勇気を持って子供を生んだ男女もいた。私の姉だけでなく。

この年に生まれ、活躍した女性は、数多い。一番は、秋篠宮妃紀子様である。他にも、女優では三田寛子、小泉今日子、川上麻衣子、森口瑤子、鈴木保奈美、斎藤由貴、伊藤かずえ、江角マキコ、国生さゆりなど多数。作家の絲山秋子、スポーツ選手では、益子直美、小谷実可子、村口史子、有森裕子など、他にも大勢いる。迷信にとらわれず勇気を持って産んだ男女の子供たちであるが、この年に生まれた女性たち

が結婚適齢期を迎える頃には、もう丙午の迷信は残っていなかった。1990年代、各地の結婚相談所にも、自分は丙午の生まれなので縁遠くて困っているという訴えは一件もなかった。(新津隆夫・藤原理加著

「丙午女 ヒノエウマ・ウーマン 60年に一度の元氣者」による)

1955年(昭和30年)から1973年(昭和48年)にかけての約20年間、日本は飛躍的な経済成長を遂げ、GNP世界第二位の経済大国に躍り出た。特に、1964年(昭和39年)の東京オリンピックとその直前の東海道新幹線開業は、歴史的な事件であった。

東京オリンピックは、10月10日から2週間続けられたが、東海道新幹線開業は、それに先立つ10月1日のことであった。この日、初めて通った新幹線ひかり号に乗って、姉は名古屋に旅立った。3日には結婚式を控えていた。1日、2日と、仲人である母の従兄S氏宅に泊まって、婚礼に備えた。S氏は、ちょうど都合のいいことに、このとき、T銀行の名古屋支店長を勤めていたのである。

姉は静岡の大学で、後に夫となるNと出会った。まじめな女子学生である姉は、Nに、講義のノートを貸したりしていた。そこから恋仲になって、なんでも学生時代にNの子を中絶したとかいう話もある。

大学を卒業して、姉は東京に出てきた。Nは、大阪の会社に就職した。遠距離恋愛ということになる。というよりも、姉はNとは距離を置きたかったらしい。Nは、名古屋に両親がいて、一人息子で……それよりも問題なのは、親戚から貰われてきた養子だった。養母の実の甥であった。子供に恵まれなかった養父母の許に、赤子のときに貰われてきた。養父母は、多くの貸家を持つ資産家だった。その家庭の複雑さが、姉に、Nとの結婚をためらわせていた。

大阪の会社に勤めていたNが、半年後、なぜか名古屋の市役所に転職した。養父母の許に帰ったのである。そのことを、姉は、ぶつぶつ文句を言っていた。

父は、この結婚に反対だった。結婚後に姉が苦勞するのが目に見えている、どうしても結婚するというならば、両方の親の反対を押し切って、駆け落ちのような恋愛結婚をすればいい、その気持ちもないなら、この結婚はやめなさい、と言っていた。姉は駆け落ち結婚をする気もなく、ただ結婚適齢期が過ぎてゆくのを恐れていた。母は、見合いも薦めたが、本人はその踏ん切りもつかないのだった。

ただずるずるとNの情熱に引きずられるように、姉は婚約した。ここに至って、父も了承した。母は「Nさんのうちは資産家だから」と賛成した。そして、昭和39年10月3日、丙午の年の1年半前、姉は名古屋に嫁いだ。

名古屋のNの養父母は、昔かたぎの人たちであったが、丙午の迷信には囚われていなかった。結婚の翌年に子供が生まれていれば問題なかったのだが、幸か不幸か、翌年ではなく、翌々年の昭和41年に第一子が誕生することになってしまった。が、養父母は、素直に初孫の誕生を心待ちにしていた。

私は、姉は勇気のある人だと思った。女の子が生まれると困る、とばかりに避妊する若夫婦が当時は多かったのだ。

昭和41年5月10日、子供の日に5日遅れて、甥のA男が誕生した。初めての子なので、姉は千葉の我が家に里帰りしていた。

「良かったわね、男の子で」

と私は姉を祝福した。「この子は、高校受験のときも、大学受験のときも、就職のときも、希少価値があって得をするよ、きっと」

実際、A男は、高校受験では得をした。大学は……落ちてしまい、1年浪人して、ベビーブーム世代と競争することになり、損をした。就職のときも競争率が高かった。丙午の翌年は、出生率が高く、子供が多かったのである。

そのA男も、今や48歳である。この次の午年は、丙午なので、60歳となる。

A男は、我が母に言わせると「名古屋に行ったとき、おもちゃを買ってあげるよ」と言うと、デパートのおもちゃ売り場で何時間も、あれでもない、これでもない、と吟味するんだよ。どれがほんとにほいいのか、なかなか決まらなくて。きっと年頃になったら、あの女か、この女か、なかなか決まらなくて周囲をやきもきさせるんだらうね」という心配があったが、女は玩具ではなく、生身の人間なので、一度捕まえたA男のことは、しっかり握って、離さなかった。で、A男も、割と早目に結婚して、二人の娘を持つ父親になった。長女は来年大学受験を迎える。

姉の結婚生活は幸せであったか？ 舅、姑夫妻との同居生活はそれなりに苦労もあったようだが、舅も姑も意地悪な人ではなく、病気になるって姉に介護の負担はかけたが、それも今は遠い昔の話である。二人とも鬼籍に入っている。姉は、夫のNと、結婚したA男と次女、そして今はやりの「結婚しない娘」である長女に囲まれ

て、幸福に暮らしている。

了

小城 ゆり子

一九四三年

戦争中に誕生。空襲にあい、新潟に疎開。
一八歳までそこで育つ。
後、千葉に転居。東京外国語大学卒。
元中学校教師。
介護していた老親の死後、小説とエッセイを書く。